マップで「宝」さがし

マップ作りを楽しみながらご近所福祉の本質に迫る

住民流福祉総合研究所＜木原孝久＞
３５０－０４５１埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 1476-1
ＴＥＬ０４９－２９４－８２８４
ホームページ http://juminryu.web.fc2.com/

⑴マップ作りの中で、「ピカッと光る」事例を探そう

支え合いマップと言えば、まず気になる人を抽出し、その人に誰が関わっているのかとか、そのご近所の課題は何かなどを調べますが、その作業をする中で、人々のふれあいや助け合いの、ピカッと光るような営みが、ときどき見つかるもので、それを見つけた時は、その地域に隠れた宝を見つけたようで、マップを作ってよかったなと思うものです。「光る営み」とはどういうものなのか。福祉にも理想というものがあります。こういうことが実現すればいいなあと思われるものです。

⑵以下の事例にピッタリか、似たような事例を探そう

そこで、通常のマップ作りとは別に、あるいは通常のマップ作りの中で、その「ピカッと光る」事例を見つけ出す作業を、少し意図的にやってみたらどうか。宝さがしです。

これから紹介する事例は、実際に支え合いマップ作りで見つけたものです。これらがその「宝」、つまり「ピカッと光る」事例です。光り方は多様で、ささやかな光、大きな光、いろいろあります。

⑶１つなら「まあまあ」、２つは「なかなかよし」３つは「ワンダフル！」

これらの事例にピッタリの事例、またはそれに似た事例を、地域で探してみたらどうか。１つ見つけたら「まあまあよし」。２つ見つけたら「なかなかよし」。３つ見つけたら「ワンダフル！」。

まず、以下の事例を丁寧に読んでいきましょう。それぞれの事例の「ピカッと光るポイント」をつかみます。ここには２７事例しかありませんが、もっといろいろあるはずです。ここには入っていなくても、「この事例は光るものではないか？」と新たに発見していただくことも可能です。（その際は、ぜひ当研究所へ情報をお寄せ下さい）

⑷「宝さがし」が何の役に立つのか？

マップ作りでは、いろいろな事実を抽出する努力をします。要援護者の存在やその人に関わっている人のこと、またはその人の問題の解決につながりそうな活動や福祉資源などを探し出し、そこから今後の取り組み課題を抽出するのですが、そういう作業を突き詰めていけば、要するにそのご近所の中から「宝を探し出す作業」だと言ってもいいのです。というのも、その宝を発見すれば、それがそのご近所を変えていく、最も重要なカギにもなるからです。

⑸見つけた宝をどう生かすのか？

もし宝が見つかったらどうするのか。例えば、身内が認知症であることを周りにオープンしている人が見つかったとします。

そうしたら、それがどうして可能になったのかを調べて、誰にでもできる方法を考え、ご近所に広げていくことができます。また、同じ事例がご近所内にないか、調べてみるのもいいでしょう。だれかが身内が認知症であることをオープンにすると、その周囲の人たちもこれに追随する傾向があるので、調べてみる価値はあるのです。

もしその人がかなり特別な資質を持つ人で、簡単に誰でもできるというものではないという場合は、シンポジウムなどで発表してもらったりして、まずは啓もう活動に活かしていきましょう。

次いで、その実践者が今後、どのようにして活動をより発展させられるのかを考えます。例えば、オープンにした家族で連帯する（家族の会づくりとか）、家族を中心とした見守り・ケアのネットワークを作る、など。

せっかく見つかった「宝」を、こうして最大限に活用するのです。ご近所の福祉というのは、たった一つのテーマに集中的に取り組むだけでも、そのご近所を変えていく力を持っています。その活動を通して、ご近所の人たちが福祉に目覚め、助け合っていこうという機運が起きてくるのです。

⑹マップ作りで宝をどれだけ掘り当てるかは、運次第？

マップ作りでどれだけ宝を掘り当てるかは、作る人の腕次第―と言いたいところですが、マップ作りを２０年以上続けてきた経験で言えば、「腕」よりも「運」次第と言った方がいいかもしれません。その「運」に最も影響をもたらすのは、参加者でしょうか。ご近所の「宝」になる活動を見つけるセンスのある住民、または実際にその活動をしている住民が参加していると、１つ２つどころか、それこそ次々と宝が出てくる場合もあります。

埼玉県のあるご近所でマップ作りをした時に出てきた「宝」を並べてみましょう。

❶買い物に不便をしているという話が一人暮らしの高齢女性から出てきました。そこで私が、「うちではネットショッピングをしているよ」と何気なく言ったところ、参加者の１人が、「私もこの人のためにネットショッピングをしてあげた」。そこから話が発展して、ＩＴに強いのは何と言っても若者。それならネットショッピングも含めて、彼らのＩＴの腕をいろいろな福祉に生かしたらどうかとなりました。

❷デイサービスを利用するようになると、普通はサロンへの参加を遠慮してしまうのですが、手押し車を押して、普通なら５分で行けるところを１時間かけてサロンへ通って来る女性がいることが

わかりました。その熱心さに皆、感激したのですが、「彼女は『誘ってくれれば行く』と言うので、近くの３人の参加者が毎回お誘いしている」、という裏話が出てきました。なるほど、それなら要援護の人も行きやすいでしょう。そこで、「お誘いグループ」を作ったらどうかとなりました。

❸高齢者のみの世帯があって、特に奥さんが引きこもりがちで、しかもゴミ屋敷（家の中も庭も）だという話が出ました。それに対して誰かが何かしていないかと尋ねたら、男性民生委員が、そのゴミを始末して、できた空間に畑を作ってあげたら、彼女は喜んで家庭菜園を始めたということです。日頃からこの夫婦に接触していたので、こういうことも可能になったのでしょう。

❹この民生委員は本当に優れた人で、ご近所内の気になる一人暮らし高齢者それぞれについて、その近隣の人に訪ね、見守りをお願いしていました。お願いすればご近所さんもやってくれるのです。

❺ヘンな宝も見つかりました。やはり高齢者から、「ゴミ出しが大変だ」という話が持ち上がりました。この地区はゴミ集積場が少ないらしく、人によっては遠くまで運ばねばならないということらしいのです。すると、マップ作りの参加者の１人から、近くの〇〇地区では行政がやってくれているという話が出ました。参加者の間では「それはいいことを聞いた。こちらの地区でもやってもらおう」となったのですが、私はこんな話を紹介しました。都内のある区の団地でマップ作りをしていたら、参加者の中の２人が、隣室の高齢者のゴミ出しをしてあげていたけれど、最近は「結構です」と断られるようになったと言うのです。どうやらその区でゴミ出しサービスを始めたため、お隣に頼まなくなったらしい。それなら手間が省けたというところですが、おそらくこれからは、この区の人たちは誰も、お隣のゴミ出しの手伝いもしなくなるでしょう。はたしてそれでいいのだろうか？と。

　ついでにこんな話も。長野県のある市社協の事業の手伝いをしていた頃、建物の敷地内にゴミステーションがあるので、これは何かと聞いたら、ヘルパーが顧客宅から引き取ってくるらしい。それが４０袋にもなったので、ゴミステーションに指定してもらったのだと。そこで私が、ゴミ出しぐらいは住民にやってもらいませんかと提案したところ、その社協ではその後１年ほどかけて、ほとんどのゴミ出しを隣家にやってもらえることになりました。

1.一人暮らしの見守りや生活支援をどうする？

①一人暮らしの女性が９０歳になると…

なぜか一人暮らしの女性が９０歳を過ぎる頃に、よく始めることがあります。「うちに来ないかい？」と周りの人をと呼び寄せてサロンを開き、お茶や菓子を提供するのです。お茶飲みついでに様子を見てもらえることや、いずれ支援を必要とする時のことをどの程度意識しているのかは分かりませんが、見守られ上手な行動です。

②「私のプライバシーを守ってくれる必要はありません」

一人暮らし女性の場合、大抵は用心深くなるものですが、その反対の人もいます。日頃は玄関のドアを開け放しにし、外出する時は「〇〇へ行ってきます」「〇日まで外出しています」と張り紙をしたりするのです。プライバシーが丸見えではないかと思われるでしょうが、本人はそんなことを少しも気にしていません。プライバシーよりも命を守ることを優先しているのです。

③一人暮らしの人がまとまれば、見守る方も効率的？

ご近所内の一人暮らし高齢者たち（６～７名）が、特定の一人暮らしの人の家に毎日のように集まって、おしゃべりしている。そのこと自体、別に驚くことではないのだが、そこに民生委員夫婦も顔を出しているというのがミソです。こういう見方もできます。民生委員が効率よく見守りができるよう、私たちがまとまればいいのだ、と。「一網打尽」という言葉がありますが、これも見守られ上手さんと考えたらどうでしょう？

④一人暮らしの女性が数軒（３～５軒）並んで暮らしていると、大抵はリーダーを中心に助け合いが行われていますが、（一人暮らしの）男性はその輪に入っていません。おしゃべりの仲間に入るというのは、男性は苦手なのです。ところが丁寧に見ていくと、何か困り事があった時など、女性たちに一定の面倒は見てもらっているようで、その代わり、女性たちから力仕事を頼まれたりしています。持ちつ持たれつ、ということでしょう。

⑤１人暮らし高齢者ばかりの集落ではどうしている？

築数十年という公営住宅。一人暮らし高齢者がかなりの割合を占めています。彼等はどうやって自分たちの安全を確保しているのか聞いてみました。①「私は向いの〇〇さんと、夜、電気がついたら大丈夫としている」「私は向いの△△さんと、朝カーテンが開いたら元気と…」。②一人暮らしの人が集まる部屋も、棟ごとにありました。③安否確認（し合うための）スポットもあちこちに。一人暮らしのリーダーたちが自転車訪問と電話訪問もしていました。聞いていた社会福祉協議会の職員いわく、「これなら、私たちの出る幕はないですね！」

2.引きこもりの人の安全をどう守る？

①引きこもり男性なりに見守られ努力をしていた？

ある一人暮らしの引きこもりがちな高齢男性のことを、みんなが心配していました。でも彼だって命は大事なのだから何かやっていないかとご近所さんに聞いてみたら、「妙なことをやっている」と。一日中庭に出て、しかも何か大声でしゃべりながら、花の手入れなどをしているというのです。そのがなり声が聞こえてくる間は、彼は元気だと。ははぁ、これもまた一つの自己防衛策かなと、感心させられました。

②「私の知る限り誰とも交流していない」？

マップ作りで、引きこもりの男性が見つかりました。大型世話焼きさんは、「私の知る限り、だれとも交流していない」と断言。そんなはずはないと、一軒一軒、「この家の人とはどう？」と指差しながら確認していったら、突然彼女が叫びました。「そういえばこの家の人が、おじいちゃん（本人）の家でおしゃべりしていたのを思い出した！」「ほら、いたじゃないか。ではこのおじいちゃんの趣味は？」「この辺りで犬の散歩をしている」「では犬の散歩友達がいるんじゃないの？」すると世話焼きさんはすぐに（住宅地図上の）ある家を指さした。「この人（が彼の犬の散歩友達）」。世話焼きさんは、信じられないといった顔をしていました。

3.迷惑かけ屋さんへの対応策は？

①大型の「迷惑かけ屋さん」

マップ作りをしていると、ご近所から「迷惑な人」と目されている住民がよくいます。あるご近所でも、ご近所の人たちに迷惑をかけている女性がいるというのですが、その人から「迷惑をかけられている人」の家に印をつけたら、なんと１３人。朝の５時頃に「ピンポーン」と来るので、こんな早朝に何事かと玄関を開けたら、彼女が立っている。用事は「ヌカミソの作り方を教えて」。そんなことなら昼間に来てと言うと、「いま知りたい」。断ることもできますが、彼女はいかにも悲しそうな顔をするので、それもできないといいます。その代わり、後でお礼の品を持ってくるとか。

こういう人をなんとなく受け入れてあげているご近所というのも素晴らしい。

4.身内でどう助け合う？

①子どもがみんな、近居するご近所

限界集落に限りなく近いご近所。いずれも一人暮らしですが、子どもはどこに住んでいるのかと尋ねたら、みんな同じご近所内でした。数えてみたら１８軒。ということは、子どもが住める空間がご近所内にいくらでもあるということです。これが限界集落の利点なのかもしれません。まさに「スープの冷めない距離」です。

②「本音を言えば、子どもと住みたい親」のギリギリの作戦

神奈川県のある主婦。息子３人は全員東京に住んでいましたが、彼らにこんな提案をしたそうです。「我が家から〇〇メートル以内に家を建てるなら費用は出してあげる」。そして今は３人共、家族共々、彼女の自宅近くに住んでいるということです。緩やかな大家族制の出来上がりです。

③姪が叔母の地元の人たちに「見守りをお願い」訪問

知的障害のある高齢の姉妹が、ご近所さんにあれこれ面倒を見てもらっています。全体としては他人のことに無関心な地域のようなのに、なぜかこの２人にだけは扱いが違うのです。その訳を尋ねたら、隣町に住む姉妹の姪が、ご近所さん宅（１０軒ほど）を一軒一軒訪問して叔母の見守り等をお願いしていたことが分かりました。「そのように頼まれればやってあげるのですか？」と地元の人に聞いたら、即座に「そうだよ」。

④息子に引き取られて行った女性のその後の運命は？

世話焼きで、しかも民生委員だった一人暮らし女性が認知症になり、息子に引き取られて行きましたが、その結果、地域の助け合いは崩壊寸前になってしまいました。では引き取られた先でどうしているのか調べたら、なんとそちらの地区で新たにボランティアをしていた！ それならば、地域で支援をすることで、こちらへ帰って来て世話焼きを続けてもらえないのか。「ケア付きボランティア」もあっていいはずです。

5.ご近所内での「生活支援」は誰が？

①押しかけ便利屋さんがいた！

今は、要支援対策で「生活支援」が話題になっていますが、それをご近所で実践している人がいます。その極めつけの事例を、東北地方でのマップ作りで見つけました。頼まれたからやる方式と、進んでやる方式がありますが、彼は押しかけ型。気がついたら我が家の庭に入ってきて、塀の修理をしている、といった具合です。この方式で、布団干し、草刈り、墓の掃除、すだれの掃除、塀や屋根の掃除、植木の手入れなど。別にお礼を求めているのではなく、楽しいからやっていると奥さんが言っていました。もしかしたら生活支援というのも、天性の資質なのかもしれません。

②一人暮らし高齢者の犬の散歩の代行を７年間も！

マップで世話焼きさんを見つけました。陶工で独身の５０代の女性。近くの老々世帯の夫が亡くなったのですが、妻は、残された中型犬の散歩は無理と、保健所で殺処分してもらうと言うので、彼女は犬の散歩の代行を買って出ました。結局犬が亡くなるまで７年間、続けました。その妻がゴミ出しにも苦労していたので、こちらの「代行」も続けてきました。近くの一人暮らしの女性もゴ

ミ出しに苦労していたので、こちらの代行も続けています。

また、お隣に回覧板を回すと、いつも止めてしまいます。一人暮らしの女性で、「こんな小さな文字は読めないのよ」。なるほどと、彼女は回覧板を回すたびに、内容をかいつまんで読んであげてから、そのまま隣に回してあげるようになりました。やる気のある人から見れば、自分の足元でできる活動はいくらでもあるようです。

③一人暮らし女性たちが庭木の剪定で一人の男性を「共同活用」

北陸地方は家も庭も広く、家族がいる間はいいですが、一人暮らしになると大変です。そこで庭木の剪定はどうしているのかと一人暮らしの女性たちに聞いたら、定年後に庭木の剪定を学んだ男性に頼んでおり、これを聞いた他の女性が「ならば私も頼もう」。一人暮らし女性たちの情報ネットにうまく引っかかったようで、彼に頼んでいる人は他に１０人もいました。お礼の仕方が、男性との関係や本人の経済状況等に応じて、１１人、全員違うというのがまた面白い。

6.要介護者をどう支える？

①共に要介護の高齢者夫婦はどうやって自立生活を営んでいるのか？

ケアマネジャーが入っているある要介護の夫婦（のみの世帯）が、どうやって暮らしているのかと調べたら、じつはそれほど心配することはなかった。「あなたはゴミ出しを」「あなたは庭木の剪定を」「あなたは車で送迎を。ただし有償で」などと周りの人にお願いしていました。地域というものは、私たちの想像している以上に安全なのです。助け合いという安全網に乗れば、ですが。

②ご近所の元看護師がセカンド・オピニオン

隣のご近所に暮らす義母が要介護になったという女性。彼女は義母を訪問するたびに、すぐ近くに住む元看護師に、いろいろ相談を持ち掛けています。そしてもっと他の意見も聞きたいという時は、同じご近所に住むもう１人の元看護師にも相談を持ち掛けていました。「セカンド・オピニオンよ」とご本人。２つの「ご近所診療所」を掛け持ち利用しているのです。

③「おむつ替えの名人」が各地に

マップ作りで、おむつ替えの名人が地域にいるのを時々見つけましたが、介護保険制度が始まってから、いなくなりました。北海道の名人は、毎日、数名の家を訪れておむつ替えをしていました。それだけでなく、介護一般を引き受けていました（無償で）。その後対象者が増えて来て、娘さんも手伝うようになりました。相手の誇りを潰さない「取り替え方」はこうやるのよ、と私に実演してみせてくれました。新潟県で見つけた名人は、周りの人だけでなく、時々近くの老人ホームにも行っておむつ替えをしていましたが、入所者がみんな「私も〇〇さん（名人のこと）に取り替えてもらいたい」と言うほどの腕前でした。

④介護者同士で助け合いはできないか？

あるマップ作りで驚いたのは、同じご近所で親を介護中の男性（いずれも６１歳）が１０人もいて、町の小学校の同窓生だったことです。誰か彼らの介護を支援していないかと聞いたら、「１人の女性が、〇〇君（１０人の中の１人）の介護を手伝っている」といいます。２人はどういう関係

なのか。全くの「友情」で手伝っていることがわかりました（つまり恋愛関係ではなかった）。彼女も今、親を介護中だといいます。他人の介護も手伝うというのは、余力があるということだろうから、彼女を中心に１１人でネットを組んで助け合えばどうかとアドバイスしました。さてどうなったか。

⑤大型世話焼きさんが施設入所して困ったご近所。さてその解決策は？

大型世話焼きだった人が、要介護になり、家族の意向で老人ホームに入所。今まで彼女の世話になっていた人や、その指導を受けて活動していた人たちは困ってしまいました。そこでどうしたか。本人と施設が話し合って、定期的に里帰りをして、要援護者の面倒を見たり、小世話焼きさんたちにあれこれ指導をしようということになりました。これでご近所も大助かり。「ご近所福祉推進のための里帰り」なんて私も初めて聞きましたが、すばらしい解決策です。

⑥認知症になっても活動を続けたがる民生委員。どうする？

同じく世話焼きで元民生委員で、認知症になった女性が、まだ民生委員のつもりで訪問活動をしているご近所がありました。それを仲間の世話焼きさんたちが、それとなく様子を見ながら、蔭からサポートしているのです。みんなの頭の中では（本人もそうですが）、彼女は担い手でも対象者でもあるのです。福祉の世界では、人を担い手か対象者のどちらかに区分けしようとしますが、住民はそんなことにこだわっていません。

7.障害者の生活をどう守る？

①知的障害者のためにご近所で雇用創出はできないか？

北海道でのマップ作りで、知的障害の夫婦が見つかりました。仕事はあるのかと聞くと、あまりないといいます。それでも簡単な仕事ぐらいなら、だれかが提供しているのではないかと追求していったら、「デメン」ならあると言います。「出面」と書くらしく、農繁期の忙しい時に、この夫婦にも仕事がきていたのです。関東地方のマップ作りでも、やはり出てきました。こちらは「デヅラ」と言っていました。このように地域で提供できる仕事がもっとあれば、障害を持つ人が地域で暮らしやすくなります。

②「隣は何をする人ぞ」の地区でふれあいを起こすには？

千葉県で、主婦たちとマップ作りをしていた時、「この辺りの人はどんなふれあいをしているの？」と聞くと、ふれあいというほどのことはしていないといいます。あきらめかけた時、たまたま犬の話になったところ、突然彼女たちは、マップ上に、どの家に何という名の犬がいるかを記入し始めたのです。それだけではありません。この家の犬は、この家の犬の子ども、その子どもがこの家に貰われて行ったなどと、犬の系譜を語り出し、「この家は（散歩のお供を）最近旦那さんにチェンジした」「この家の人は犬の散歩をさせながら、沿道の一人暮らし高齢者宅を見守っている」などと言うのです。人間の名前は知らないのに、犬の名前は全部知っていました。その後、女性たちはこれらの情報を基に「ワンちゃん・コミュニティ」という運動を始めました。丁寧に探っていけば、その地域特有のふれあいがあるものなのです。

③仲間のいる所へ「押しかけサロン」

あるマップ作りで、サロンらしきものを探したら、９カ所見つかりました。その中にはデイサー

ビスセンターでやっているものも。なぜデイサービスなのかと聞くと、初めは地域でやっていたが、その１人がデイサービスを利用するようになり、それならばと、その後はみんながデイサービスに出向いて、そこでサロンを開かせてもらうことになったというわけでした。この柔らかい発想が、とてもいいですね。

④要介護者を仲間に加えたサロンをどうやって開く？

ある一人暮らし女性は、ほとんど寝たきりで、一日中ベッド暮らし。退屈しているかと思えば、そんなことはありませんでした。彼女がデイサービスから戻ってくるのを見計らって、近所の数名の高齢者たちが押しかけて来て、彼女のベッドを囲んでサロンを開いていたのです。どちらが主役なのかが分からないのがミソです。

⑤一人暮らしの認知症の女性宅に「見守り型の押しかけサロン」

ある町内の西隅に公会堂があって、町内会が主催するサロンが開かれています。参加者はいずれも「班長」。マップ作りの時、東の方でもサロンのようなものが行われていないかと聞いたら、ありました。２軒の家が自宅を開放して開いていたのですが、その１つが、認知症で一人暮らしの女性宅でした。何故か人が集まって来るといい、その数５～６名。その１人に、何をしに行くのか尋ねたら、「見守りがてら」。要援護者宅に皆が「見守りがてら」やって来る、押しかけサロンでした。

⑥男性をどうやってサロンに引き込むか？

サロンのメンバーとマップ作りをしました。３０数名の大所帯。その中の男性に印をつけていっ

たら、１５名。半数近くが男性なのです。どうやって男性を引き込んだのかとリーダー（男性）に聞いたら、「俺が全部、オルグした」。彼は役所の組合の幹部をしたことがあり、そのルートで一人ひとりを説得したというわけでした。